

1 対象機関の概要

- (1) 機関名：佐賀医科大学
- (2) 所在地：佐賀県佐賀市鍋島5丁目1番1号
- (3) 学部・学科構成：医学部医学科，看護学科
- (4) 附属施設：附属図書館，保健管理センター，医学部附属動物実験施設，医学部附属実験実習機器センター，医学部附属病院
- (5) 学生数：925人（平成13年4月1日現在）
- (6) 教員総数：282人（平成13年4月1日現在）
- (7) 沿革および現況

本学は、当時国が進めていた無医大県解消計画に基づき、昭和51年10月に開学した医科系の単科大学である。開学当時は、医学科のみであったが、平成5年4月に看護学科を設置した。また大学院は、昭和59年4月に医学研究科（博士課程）を設置し、平成9年4月には、医学研究科を医学系研究科に改称して、看護学専攻（修士課程）を増設し現在に至っている。

医学部附属病院は、昭和56年10月に13診療科325床でスタートして現在15診療科611床となっている。

本学の基本理念は、医科大学に課せられた教育・研究・診療の三つの使命を一体となって推進し、医の実践と、その科学的創造形成の過程で包括的に医学的問題をとらえ、柔軟にかつ先導的にこれを処理、解決し得る能力を持ち、医の倫理に徹した医師・看護職者を養成し、もって医学・看護学の水準及び地域医療の向上に寄与することである。

本学は、開学以来小論文、面接を重視した入試を実施するとともに、6年間一貫教育、統合カリキュラム、臓器別・機能別カリキュラムの導入、臨床実習の重視等の教育方法を採用している。

また本学は、講座の効率的な運営を目的として、同一系統のものを大講座として統合している。

附属病院は、開院以来他大学にない臓器別診療グループを設けている。外来は一次外来（総合外来）と二次外来（臓器別の専門外来）に分け原則として初診は一次外来としている。また、カルテは1患者1カルテとし、診療記録センターに一括中央保管するシステムを採用した。

平成11年に本学は、外部評価を実施しその結果に基づき、学生による授業評価を実施する等の改善を図った。また、教育研究組織・大学院改組再編のためのワーキンググループを設置し検討を行い、診療面では、平均在院日数の短縮、横断的診療班の設置等を行っている。

2 教養教育に関する考え方

医学科：昭和53年4月に開講。本学の医学教育は6年間一貫教育の統合カリキュラムを特徴とする。6年間の教育は、教育内容から5つのフェーズに分けられる。この内のフェーズが、教養教育（一般教育）に相当する。しかしフェーズの履修の仕方は、が終了して、に進むというのではなく、履修内容の関連性を考慮して重なり合っている。これは教養教育も医学教育のなかの一部と考える立場にもとづくものである。当然のことであるが、一般教育を担当する教官も医学部に所属しているので、学部教授会をはじめとして、教育委員会、カリキュラム委員会など各種委員会のメンバーになることができ、それらを介して医学部における教育全体にかかわることができる。本学におけるこうした医学教育の特徴は開学以来、今日に至るまで、基本的には変わっていない。

しかし、フェーズにおける教科目の種類や履修条件などは、昭和53年から平成11年度まで続いた旧カリキュラムと平成12年度からスタートした新カリキュラムにおいては大きな違いがある。旧カリキュラムの基本型は開学時に作られたもので、大学設置基準による規制を受けている。したがって医学教育の中の教養教育といっても、その中味は、従来の大学における教養教育と大差はない。強いて特色を挙げるとすれば、これから医学を学ぶものに必要と考えられる一般教科目を必修としたことであろうか。

平成12年度から新しいカリキュラムによる教育が始まった。この新しいカリキュラムでは、医学教育全体の中におけるフェーズの位置づけが、単に教養を高めるための教育といったところから、医学と社会との係わり、医学の人間科学的側面、医学を学ぶ上で役立つ自然科学的知識・技能などを教育するといったところへシフトした。ここに大きな特徴がある。

語学教育もフェーズに属する。新旧いずれのカリキュラムにおいても、医学の分野で国際化に対応できる人材を育成することが目標となっているが、新カリキュラムではその傾向が強化されている。

看護学科：平成5年4月開講。4年間の看護カリキュラムの中で教養教育はその一部として捉えられる。医療の場で働く者として、人間のさまざまな面が理解できること、また、十分に科学的な思考ができることが必要であり、その教育をするのが教養教育であると考えられる。この教育は4年間の看護教育の中で、1年次前期に集中する傾向はあるが、科目によっては関連する専門科目の開講時期を考慮して2年次以降に開講されるものもある。

3 教養教育の目的及び目標

医学科：【目的】本学医学科における教育の特色は、6年間一貫教育の統合カリキュラムで、教養教育と専門教育が学年によって区分されることなく、くさび型になっている点にある。その中で教養教育は、社会の広い分野にわたる豊かな教養を身につけた医師を育て、医学に必要な基礎科学の知識を習得することを目的とし、医学専門教育との有機的な統合を目指したカリキュラム編成がなされている。

【目標】本学が開学した昭和50年代においては、教養教育のカリキュラムの構成は、大学の設置基準による制約をうけた。本学もフェーズ に一般教育科目として人文系科目、社会系科目、それに自然系の科目を用意し、学生は一定の基準でこの3つの系の科目を履修することが必要であった。

開設時から平成11年度に至るまで掲げられたこのフェーズ における学習目標は次の4つである。

1. 人間の文化活動、芸術、文学、思想を理解する。
2. 人間の歴史と現代社会、政治、経済、法律を理解する。
3. 基礎科学としての自然科学の基本的な知識と方法を身につける。
4. 今後の国際社会に対応し、また医学に関する情報収集、表現する手段として、いくつかの外国語を学び、少なくとも英語については、文系、理系の難度の高い文章が読めることに加え、比較的簡単な文章表現や会話ができるようになる。

本学は、医学教育において専門教育を早期に導入することの必要性を痛感し、カリキュラム構成にそれを反映させたが、ここに掲げられたフェーズ の目標から明らかなように、豊かな教養を身につけ、医学を学ぶための基礎科学を学習することが必要であることを強く認識していた。その中でも本学が医学教育における教養教育、すなわち一般教育の意義をどのように捉えていたか。この点は、医科大学に割り当てられた12人の一般教育担当教官のポストをどの学科目に置いたかに現われている。教官の配置は哲学、心理学、法学（社会保障法、医療訴訟）にそれぞれ1人ずつ、物理学、数学に1人ずつ、化学、生物学に2人ずつ、それに語学に3名（英語2人、ドイツ語1人）であった。上の目標1、2、3については、医学と関連する部分が多いと一般に考えられている分野の科目に専任を配置しているのがわかる。しかし医学生だけを対象とした専任教官による教育内容であるとはいえ、いわゆる一般の大学の教養課程の内容と大きな違いはなかった。

ただ、本学のフェーズ には、この一般教育科目の

ほかに基礎教育科目が設置されており、ここに専門教育と関係が深い科目が置かれた。開講時期も専門教育との関連性を考慮して2年次とした。唯一例外は医学概論であり、これは1年次前期から開講した。この科目の目的は、入学時から医学生であることの意識をもたせ、さまざまな医学・医療の問題に積極的に関心を抱かせることにあった。内容はとくに定式化されておらず、例えば、本学の医学専門教育に携わる教官や、地域のさまざまな医療活動に携わる医師たちから、医療や医学について信条や体験を語ってもらうといったことも含まれた。しかしこの医学概論には、必ず早期体験学習（アーリー・エクスポージャー）を組み入れた。これは新入生が学外の重度心身障害者を収容する施設などに出向き、現場の活動を実際に体験するプログラムである。この体験は学生に強いインパクトを与え、医学が抱えるさまざまな問題に幅広く彼らの目を向けさせるのに役立っている。

語学に関しては、フェーズ の学習目標4に掲げることが実現できるように、英語では開学2年目から外国人教師を入れ、4年次まで教育できるようにした。しかし、専門科目の学習が多くなると学生の関心が下る一方で、開講年次の幅を狭めざるを得なかった。初期に4年次前期まで開講された英語は、このカリキュラムの最後の開設年度となった平成11年度では、3年次前期までとなった。

医学の道を歩もうとする若者は、市民としても豊かな教養を身につける必要があるとして、特に一般教育の科目の内容を医学的なものに偏らせることなくカリキュラムを組んだのであるが、その意図は十分に達成されたであろうか？受講する学生の声は、やはり一般教育科目の学習には興味が湧かないというものが多かった。こうした状況の中で、平成3年の大学設置基準の大綱化が発効した。しかし本学では、くさび型のカリキュラムを組んでいるし、フェーズ の教養教育が目指すのは、開学時に定めた目標が理想であり、その目的に合わせて作られた科目編成を変える必要はないと判断し、内容の見直しをあえて行わなかった。この時期、わずかに変えたのが、保健体育の講義科目である。この科目の内容は、医学生が専門科目の中で学ぶという理由で廃止した。

その後、教育の自己点検・評価が多くの大学で行われるようになり、本学でも平成7年に委員会が設置されて、平成7年度末には学生による授業評価が医学科の学生のみを対象として全学年にわたって行われた。結果は、教養教育に相当するフェーズ のカリキュラムに対してきびしいものであった。医学概論は別として、その他の科目に対する学生の満足度は低く、カリキュラムが目標とした豊かな教養を身につけるとい

と現実の学生との間のギャップの大きさに愕然としたのである。カリキュラムの見直しが急務であった。こうして作られたのが平成12年度からスタートした新カリキュラムである。まだ、1年次が終わっただけの学年進行中のカリキュラムである。この新カリキュラムでは、旧カリキュラムに較べて、学習目標が医学・医療とのかかわりを強調する方向にシフトした。これが特徴である。

1. 医学を学習するための基礎的な知識と方法を身につける。
2. 医学・医療の対象となる人間とそれが実践される社会についてよく理解する。
3. 医療活動のグローバル化に対応できる人間としての教養と語学力を身につける。
4. 地域社会で良き市民として生きるための基本的な倫理感や遵法精神を身につける。

このように、旧カリキュラムに較べて、学習目標が医学・医療とのかかわりを強調する方向にシフトした。こうした目標を設定した理由は、たしかに学生に興味をもたせるためではあるが、そこにはもう一つ、医学教育の中で、人間の理解や社会制度の理解が重視されるようになったという時代的な背景が絡んでいるのである。フェーズの区分からは、一般教育などの表現が消え、総合人間学、基礎科学、基礎医学、語学となった。これらの区分に入る個々の科目については「4(2)教育課程の編成及び履修状況」を参照のこと。旧カリキュラムの中で医学概論とよばれた科目は、医学生満足度が高かったものであるが、新カリキュラムでは医療入門として1～3年次までの通年の科目になり、内容の充実が図られた。さらにこれと生活医療福祉学を内容的に連携させ、障害者、高齢者、傷病者の生活支援と医療の関係について総合的に理解できるようにする工夫もなされている。現在、この新カリキュラムは、1年次の部分が実施されたにすぎないが、学生の学習態度はきわめてよい。

基礎科学に区分されるのは、旧カリキュラムの一般教育自然系に属する科目が多いが、ここでの特色は、情報科学を通年科目として入れ、情報化時代に対応できる医師を育てようとしていることである。他の科目は、自然科学としての医学を学ぶための基礎知識を身につけさせるものであり、内容的に以前と大差ないが、学習期間が短くなり1年次だけで学習が終わるところに違いがある。この教育を受けたのはまだ1学年にすぎないが、学生には好評である。

語学は新カリキュラムでは、教育効果をあげるために30人弱の少人数クラスを編成した。英語は3人の専任スタッフで、10週間を単位としてローテーションを組んで、特に自然科学や医学に関係する英文の理解や

会話などが教えられる。この教育方法は、学生のみならず教官にも好評である。

以上のように、新カリキュラムはスタートしたばかりであるが、少なくとも1年次が終わった現段階では、医学・医療との関連で人間・社会を理解させようとした科目編成は成功しているといえよう。しかし医学教育における新カリキュラムの評価はまだ先のことである。

看護学科：【目的】平成5年4月に開講した看護学科のカリキュラムは、学年進行が終わった翌年度（平成9年度）から、新カリキュラムに移行した。新カリキュラムでは、4年間で学習すべき内容を系統的に統合し、内容の重複を避けた。これにより卒業に必要な単位数、授業時間が、以前のカリキュラムに較べて少なくなった。しかし、基本的な構想、目的、目標は変わっていない。本学科は、学生が看護・保健・福祉の分野で貢献できる人材を育成することを目的としているが、それを実現するためには、当然、専門的知識を習得するだけでなく、人間や社会について多面的に理解できるようになることが必要である。新カリキュラムの教養教育の区分に入る基礎科学、人間科学、語学はこのことを目標としている。

【目標】このうち基礎科学の科目は基礎物理（生体の物理）、基礎化学（生体の化学）、基礎生物（ライフサイエンス）と科学論文の書き方であり、これらの科目は、看護専門科目の内容の理解のための基礎的知識を提供する役割もはたす。人間科学には13科目が開設されているが、このうち人間の心理・行動を取り扱う心理学、発達心理学、臨床心理学、保健行動科学の科目、文化と医療なども取り上げる哲学と生命倫理の科目、医療・福祉と社会などを取り上げる社会学などが全て必修となっている。また、社会の国際化が進んでいる今日、これに対応できる看護職者を育てる必要があり、英語を必修にしたほかに、九州という土地柄も考慮して中国語も学習できるカリキュラムを設けた。平成12年度の卒業生は、この新カリキュラムで学んだ初めての学生である。4年間の看護教育のなかで、この新カリキュラムの教養教育が目標としたことをどの程度達成できたか、その評価はこれからである。

4 教養教育に関する取組

(1) 実施体制

運営組織： 学部教授会の下に教育委員会があり、この委員会が医学科・看護学科の全ての教育活動を統括する。このなかに教養教育も含まれる。委員会は、教育担当副学長、医療担当副学長、臨床医学系、基礎医学系から数名、看護学系と一般教育系から各1名によって構成され、教育担当副学長が委員長となる。

この教育委員会の下に医学科カリキュラム委員会と看護学科カリキュラム委員会が併置され、それぞれ、当該学科におけるカリキュラムの編成や改編にかかわる事項を審議する。医学科カリキュラム委員会は、教育担当副学長と各フェーズのチェアパーソン、及びコ・チェアパーソンからなる。また、看護学科カリキュラム委員会は、教育担当副学長と大区分のチェアパーソン、及び小区分のコーディネーター（看護学科の教授全員、及び一般教育系教授3名）からなる。

このように、いずれのカリキュラム委員会にも一般教育の教官が委員会の一員として加わり、教養教育が医学教育カリキュラム、看護学教育カリキュラム全体の中で考えられる体制になっている。

平成11年度より、年度末に医学科、看護学科の両方において、教科主任による担当科目の授業評価をはじめた。これは教育委員会が定めた質問項目に答える形式で行なわれる。各教科主任が提出する授業に関する自己点検・評価の内容は、医学科ではフェーズチェアパーソンによって、また看護学科ではコーディネーターによってまとめられ、問題点はそれぞれ、当該カリキュラム委員会において検討され改善が計られる。

なお、医学科のフェーズ（教養教育）では、フェーズの性格から、1つの科目の教育を全て外部からの非常勤講師に委ねる場合が多いが、この場合、フェーズの趣旨を理解してもらった上で委嘱し、学内の教官が教科主任となって、必要があれば講義内容を調整する役割をはたす。看護学科の教養教育にかかわる非常勤講師の場合も学内教官が教科主任となり、医学科と同様な機能をはたす。

平成12年度より、さらに受講生による授業評価も行い、教科主任が担当科目を点検・評価をする際の資料として利用できるようにした。学生による授業評価はまだ試験段階にあり、平成12年度においてこの評価の対象になった科目は、フェーズの教養教育の部分では、数科目に過ぎない。

また、以上の授業評価とは別に、教育・研究の点検・評価委員会において学生による授業評価が全学的な規模で実施されている。第1回は平成7年度末に医

学科のみを対象として行われ、結果は「医学教育 - 18年の歩み・アンケートによる点検・評価・・・」と題する報告書にまとめ、平成9年度末に刊行された。この報告書では、各フェーズにおける全科目の評価値（講義の満足度など）が、値の大きさの順にならべて表示されたので、あらかじめ担当科目の記号を個人的に知らされている教科主任は、フェーズ内における担当科目の評価値の順位を知ることができた。フェーズの全科目の評価値もこのようなかたちで報告書に記載されている。第2回の教育の点検・評価にかかわる授業評価はまだ実施されていない。

ファカルティー・ディベロップメントは、医学教育ワークショップというかたちで行われている。開学初期に学内で2回開かれた以後、しばらく空白の期間において、平成7年度からまた毎年度1回の割合で学外の施設を利用して行われるようになった。研修は1泊2日のスケジュールで、参加の対象者は医学部及び附属病院所属の講師以上のものとしている。最近のワークショップの内容は、カリキュラム・プランニング、問題立脚型学習（Problem Based Learning）の方法などであるが、教養教育を担当する教官も医学科、看護学科のその他の教官と共にワークショップに参加している。ワークショップは、単に、取り上げられたテーマについての学習にとどまらず、日頃接することが少ない人々と医学教育、看護学教育について意見を交わす場としても重要であることが、多くの参加者によって認識されている。

(2) 教育課程の編成及び履修状況

医学科：開学年度から平成11年度の入学生まで続いた旧カリキュラムのフェーズにおける科目の区分は、一般教育、語学、保健体育、基礎教育である。一般教育はさらに人文、社会、自然科学の3つに細分される。

人文系には哲学、倫理学、心理学、歴史学、文学、美学があり、社会系には法学、政治学、経済学、社会学、がある。このうち心理学だけが4単位で、他は全て2単位である。履修要件は哲学2単位、心理学4単位を含めて12単位以上、社会系では法学2単位を含めて8単位以上である。

自然科学には数学、物理学、物理学実験、化学、化学実験、生物学、生物学実験がある。これらは全て必修であり合わせて27単位となる。

基礎教育科目には、医学概論、遺伝学、情報科学、生態学、人類学、数理科学が1年次から3年次にまたがって開講される。このうち医学概論、と遺伝学が必修で計4単位、あと2科目4単位を選択必修とした。

以上のうち一般教育科目は、大学設置基準に定められた教養課程の科目に属するものである。医学と関係するところが多いと考えられる科目を必修にした点に、本学における教養教育に対する姿勢が出ているといえようか。しかしこの辺が、設置基準の枠のなかで医学専門教育と教養教育を連係させようとする場合にできる限界である。

基礎教育科目のなかの医学概論は、教養教育のなかではユニークな科目である。これは医学を学ぼうと入学してきた学生にその気持ちを失わせないよう、また、さらに早期から医学・医療の問題に対する関心を高めようとする目的で導入されたものである。この科目にはアーリー・エクスポージャーがあり、学生は学外の医療施設の患者さんや福祉施設の利用者とふれあう機会が与えられた。これは学生には大変に好評であった。

この他に、語学教育が行われ、英語の他にドイツ語も必修としたが、ドイツ語に対する関心の低さが常に目立った。

新カリキュラムへの移行。平成7年度末に、医学科のみについて全学年にわたって、学生による授業評価を実施した。その結果をみると、講義に対する満足度などは、フェーズの一般教育系科目が平均してもっとも低かった。不満の理由は、興味がない、難しい、理解できないなどが主たるものであり、その背後には学生の教養教育に対する関心の低さがうかがわれた。

これを改善するには、まず開講される科目を学生が興味をもてる内容にする必要がある。このことを念頭

において新しいカリキュラムが作られた。新カリキュラムを編むにあたっての基本方針は、1)フェーズの科目の内容をできるだけ医学に関連したものにすること、2)医学・医療がもつ社会科学的側面、人間科学的側面の教育を強化すること、と同時に3)自然科学としての医学を理解するのに必要な基礎的学力を養う科目も必要であること、さらに4)特に実践的な英語力を高める教育をすること、5)医学・医療に対する興味、関心を高める科目を設けること、などである。

新カリキュラムは平成12年度から始まったが、その編成は次のとおりである。科目の区分は総合人間学、基礎科学、基礎医学、外国語である。

総合人間学の中には、人間学、基礎心理学、医療心理学、医学史、文章論、芸術、社会法制、生活医療福祉学、経済学(医療)、医療入門、である。これらの科目の開講時期の多くは1年次であるが、人間学、医療心理学、社会法制については4年次とした。これは4年次で学ぶ専門科目の内容との関連性を考えての措置である。

人間学では、死すべき運命になった人間の存在についての理解を深める講義が行われる。これはこの時期に学ぶターミナル・ケアと結びつく。医療心理学では、カウンセリング的態度を学ぶが、これは臨床入門の内容とつながる。また、社会法制では「患者の生活保障と法」が取り上げられ、その内容は、その後学ぶ社会医学の内容と有機的に関係づけられるようになっている。

医療入門は、1年次から医学・医療が抱えるさまざまな問題について人文・社会科学も含めた広い視野で学ぶことを目的として導入されたものであり、通年科目として3年次まで続く。学生はこの科目を通して、医師として基本的な構えや、医師と患者のコミュニケーションの在り方、といったものから、プライマリー・ケアの実際を体験するといったものを、講義、グループ学習、実習などの形式で学ぶ。この科目は1年次では、生活医療福祉学と取り上げる内容の面で有機的に連係できるようになっている。

以上、総合人間学の科目のうち必修科目は、人間学、医療心理学、生活医療福祉学、医療入門、である。単位数は医療入門が4単位/通年であるほかは、すべて2単位である。卒業に必要な単位数は28単位であり、このうち必修科目の単位が22単位である。

基礎科学に入る科目は、数学(2単位)、統計学(2単位)、物理学(4単位)、物理学実験(1単位)、化学(4単位)、化学実験(1単位)、生物学(2単位)、生物学実験(1単位)、情報科学(4単位)で

あり、自然科学としての医学を学ぶ上で必要な基礎学力を養う。したがって内容的には大学の教養課程に準ずる。これらは全て必修であり、履修面での特徴といえば、1年次ですべてが終了することである。

もう一つ履修面での特徴としてあげられるのは、1年次生に、入学直後2日間を使って天秤、ピペット、pHメーターなどの基本的な操作を習得させ実験に慣れさせるようにしたこと、また同時に図書館の利用法やパソコンの操作法も教えて、入学後の早いうちに大学での勉学の姿勢が取れるようにしたことである。こうした基礎的訓練を早期に導入するのは効果がある。

また、この新カリキュラムでは、1年次後期から、フェーズの基礎医学教育の科目である細胞生物学を組み入れて、現代医学への導入を早めた。この教育にも生物学、化学担当の教官が参加する。

2年次にある自然科学系の授業は、1年次の延長ではなく、基礎医学として区分され、ここに6種類の基礎医学特論が入る。基礎医学特論(数学)、基礎医学特論(物理学)、基礎医学特論(化学)、基礎医学特論(生物学)、基礎医学特論(数理学)、基礎医学特論(人類学)である。このように表記する理由は、括弧内の分野について、特に医学と関連のある内容をとりあげて学ぶことを明確にするためである。1クラス20~30人で学ぶことになっている。単位は2単位/科目で6科目中2科目を選択必修。前期ですべて終了する。この部分は13年度から始まる。

以上のように、新カリキュラムにおける自然科学系の教育は、旧カリキュラムに較べて基礎医学への導入部分にウエートをかけるようになってるのが特徴である。語学の区分には、英語、ドイツ語、フランス語、中国語、ラテン語が入る。新カリキュラムでは、英語を中心とした実践主義と多言語主義を鮮明にした。1年次においては英語を必修(4単位)とし、もう一つの外国語をドイツ語、フランス語、中国語の中から一つ選択必修(4単位)とした。旧カリキュラムではドイツ語だけであったから、選択肢が増えたことになる。こうして、1年次の英語に関しては、専任の教官3人が95人のクラスを3等分して少人数クラスを担当できるようになり、これに対応するかたちで、ドイツ語、フランス語、中国語も少人数教育ができるようになった。13年度から始まる2年次のカリキュラムでは1年次の外国語に、さらにラテン語を加え9種類(10クラス)の選択肢から2種類(1単位/種類)を選択必修させる。これは前期だけで終わり、後期は英語とドイツ語のみを自由科目として用意した。2年次は13年度からはじまるが、選択が特定科目に集中する可能性があり、クラス編成に難しい面が出てくるかもしれない。

語学の履修に関しては、新カリキュラムでは必要単

位数は10単位と、旧カリキュラムの14単位に比べるると少なくなったが、少人数クラスということで、むしろ学生、教官双方の意欲が高まり教育効果は上がっている。

看護学科：看護学科は平成5年4月に開講した。この時に用意されたカリキュラムでは、教養教育に当たる部分の区分は、人間科学、外国語、保健体育である。人間科学の科目の構成は、医学科のそれに準じるものであった。とくに人文、社会系の科目構成は同一である。これは、教養教育の内容には学科の違いはないはずであるから、事情が許す限り、看護学科の学生は医学科の学生と一緒に学ぶのがよいと考えたからである。

自然科学系の履修は、将来の専門との関係で医学科と分けざるを得なかった。この理由から、区別するために数学、物理、化学、生物の上に「基礎」をつけた。

しかし、これだけでは看護職者の教養としては不十分だということで、人間科学の区分に、人間と環境、男性と女性、人間と病、生命倫理・死生観の科目を設け、これらを全て必修とした。開講は1年次から4年次にわたる。

語学は、英語を1、2年次で6単位必修とし、このほかにドイツ語と中国語から1科目を選択必修とした。後者は1年次で終わった。

このカリキュラムは、学年進行の終了を待って、平成9年度より新カリキュラムに移行した。新カリキュラムを編成した理由は、旧カリキュラムにおいて内容に重複が目立った専門科目および人間科学の科目を整理して、今日の社会が期待する看護職者の役割に応えられる科目の編成を行うためと、学生がもっとゆとりをもって勉学できるようにするためであって(卒業に必要な単位数を143単位から133単位に削減)、看護学教育の中での教養教育の位置づけには大きな変化はない。

ただ、教養教育を医学科と合同で行うのがよいとして、旧カリキュラムで強調された医学科との合同の科目数は、両学科のカリキュラム編成の事情などにより激減している。現在、合同で行われている科目は、美術(医学科の芸術)、哲学(医学科の人間学)、経済学のみである。経済学からも、教育内容が違ってきた(医学科では経済学[医療])ので分けてほしいとの要望が出されている。

(3) 教育方法

医学科：教養教育に相当するフェーズの教育目標は、旧カリキュラムでは、豊かな教養を身につけることであった。平成12年度から始まった新カリキュラムでは、将来医療に携わる医師のたまごとして、患者さんを社会で生活する具体的な人間として、多面的に理解し接することができるようになること、またそうした人びとの医療環境をよく理解できるようになること、さらにまた、医学を学ぶ上で必要となる基本的な知識を身につけること、などである。

看護学科：教養教育の目標は、将来、看護職者になるものとして、看護の対象を一人の生活者として総合的に捉え援助していくために、人間や社会について多面的に理解できるようになることである。

教養教育における授業形態、学習指導法、学習環境、成績評価は次のとおりである（平成12年度の状況を基本とした）。

・授業形態

医学科

総合人間学、基礎科学の区分に入る科目の講義は、1年次生専用の講義室（座席数130）で行われる。必修は全員一斉の授業となる。

語学の授業は、通常は3室（座席数は各40～50）で行われる。1クラスは英語では30名弱、ドイツ語、フランス語、中国語では20～50人。LL教室（64ブース）も使われる。

看護学科

基礎科学、人間学の区分に入る科目の講義は、1年次生専用の講義室（座席数162）で行われる。この講義室は、医学科と合同の講義でも使われる。

語学の授業は、英語では、講義室（座席数60）一つを使ったり、30人弱の2クラスに分けて小講義室を2室利用したりする。ドイツ語、中国語の授業は、30人弱のクラスを編成して、それぞれ小講義室（座席数60）で行われる。

・講義室の設備

医学科、看護学科の講義室に備えてあるもの。モニターテレビ4台、オーバーヘッド・カメラ（OHC）1台、オーバーヘッド・プロジェクター（OHP）1台、VHS用とベータ用のビデオデッキが各1台ずつ、スライドプロジェクター、備えつけのスクリーン、マイク。その他可動式のデータプロジェクター2台。

・学習指導

オフィス・アワーを設けている者、特に時間を限らず教官室でいつでも対応する者、インターネットで対応する者など、様々である。

・生活指導

医学科では、全学年にわたってチューター制を採用。1グループ5～6人の学生を助手以上の教官が受け持ち、諸々の相談にのる。チューターは、同じグループを2年間受け持つ。

看護学科では、1、4年次生についてのみ、医学科と同様のチューター制を採用。2、3年次生については、学年主任が対応する。

・早期体験学習（アーリー・エクスポージャー）

医療入門と生活医療福祉学が連携して年6回（6日）、学外の医療施設、福祉施設で患者さんや施設利用者ともふれあう機会をもち、その人達と同じ目線で見、考える姿勢を学ぶ。

看護学科でも、医学科と同様のプログラムが専門教育の導入部（基礎看護学）として実施される。1年次生が5月に、老人保健施設、医療施設などを見学・実習して、看護とは何かについて学ぶ。

・実習室

生物実習室座席（座席数104）、化学実習室（座席数104）、物理実習室（座席数104）。これら3室は専門科目の実習にも使われる。

・情報処理センター

パソコン100台。ここは、情報科学の講義・実習室（医学科）も兼ねる。

・自習室

個別自習室1室（全学年用）平成12年度末で閉鎖。平成13年度より始まる問題立脚型学習室に転用。集団自習室1室（全学年用）。

・図書館（24時間開館、平日）。

・成績評価

出席、レポート、発表、試験の成績などを総合して行われることが多い。成績は、優、良、可、不可

・授業の点検・評価

学生による授業評価。12年度はまだ試験段階。教官全員には、担当科目の授業に関する点検・評価を求めて教育改善のために利用する。

以上のような体制で教養教育の目標達成に臨んでいる。

5 変遷及び今後の方向

本学の教養教育の変遷については、「2 教養教育に関する考え方」、「3 教養教育の目的及び目標」、「4(2) 教育課程の編成及び履修状況」の項で述べたので、ここでは主として今後生じてくると思われる問題などについて述べる。

医学科は、昭和53年度に入学した第1回の入学生から続いたカリキュラムを、平成12年度の入学生から新カリキュラムに切り換えた。現在、この新カリキュラムが学年進行中である。

開学以来続いてきたカリキュラムの改善を検討するにあたって、当時の学長から出された要望は、まずはフェーズの一般教育科目の内容の見直しと、医学概論の充実とを急いで検討してほしい、というものであった。その他には、フェーズの基礎医学、フェーズの臨床医学の教育について、医学教育界で今日注目されている教育法、すなわち問題基盤型学習(PBL)の導入を検討してほしい、などがあつた。

新カリキュラムのフェーズでは、2年次のカリキュラムが、旧カリキュラムに較べてかなり縮小された。その結果、2年次の前期からフェーズに使える時間が以前よりずっと増えることになった。フェーズではこの時間を使って、専門教育の入門的性格をもつ科目を設け、これをPBL方式で行うことにした。科目名は、人体科学入門であり13年度4月からスタートする。

フェーズの臨床教育が中心となる期間は、3年次から4年次にかけての間である。平成12年度の1年次生から始められた新カリキュラムが、一応の完成をみて教授会で承認されたのは、平成12年2月であった。しかしこの時点では、フェーズのカリキュラムは、PBL方式の教育法を導入することに関しては、これを前向きに考えるが、どのように取り入れるかについては結論を出していなかった。この問題については、平成12年度に入ってから鋭意検討がなされ、結局、個々の授業科目に部分的にPBL方式を導入する程度のことをするだけであれば、それは単なる時間の浪費にすぎず、それくらいなら導入はしない方がよい、本当に教育効果を上げるために取り入れるというのであれば、臨床教育の内容のコアカリキュラム化も同時に行うべきだ、という結論に至った。

現在それを具体化する作業が始まっている。コアカリキュラムに基づくPBL方式の教育では、症例が中心となり、それを倫理的、人間的、社会医学的側面なども含めて、総合的に分析し解決することを学ぶ。

すでに述べたように、新カリキュラムにおけるフェーズの教育は、現在、1年次が終了したばかりの段

階であり、ここで意図した教育の改善がどの程度達成できたかは、現時点では正確に評価できない。しかし、1年次の内容に限っていえば、目的はある程度達成されたように思われる。

フェーズの教育の全体的な評価は、このように新カリキュラムの学年進行が終わるのを待たねばならないが、現在、ひとつ懸念されることが生じている。それは、先に述べた臨床教育において、コアカリキュラム化とPBL教育の導入が計画されていることと関係する。

新カリキュラムのフェーズの科目では、専門教育との関連性を考慮して、社会法制、人間学、医療心理学を4年次に設けた。今後、臨床教育のコアカリキュラム化とPBL方式の導入を考える場合、当然、これらの科目を単独で4年次に開設することの意義が問題になるであろう。

この問題がフェーズの新カリキュラムにおいてどのように取り扱われるようになるか？それは本学の医学教育全体の中で、フェーズの意義をどう考えるかということとつながる大きな問題であり、今後、全学的に慎重に論議しなければならない。

看護学科は、今年度、平成9年度から始められた新しいカリキュラムによる卒業生を初めて世に送り出したところである。したがって、この新しいカリキュラムによる教養教育についての、看護学教育全体の中でこの評価は、これからということになる。

すでに述べたように、看護学科の設立当初、看護学生と医学生とが、教養教育の部分を一緒に学ぶことは、将来共に医療の場で働く者として大変に意味のあることだと考え、合同講義をできるだけ多くしたはずである。現状はどうであろうか？合同科目は最初は7科目と多かったが、両学科のカリキュラムの編成の都合や医学科フェーズの内容が医学的内容にシフトしたことなどから、現在ではわずか3科目になってしまった。しかもそのうちの1教科は、授業を分けて行うことを希望している状態である。

残念ながら現段階では、これを元に戻す有効な方法は見当たらない。しかし、合同にした方がよい科目については、今後、何らかの形でそれを実現させる道を探っていかなければならない。看護学科においても医学科と同じ目的で、くさび型のカリキュラムを採用している。しかし、3年次後期開講の臨地実習までに修得が必要な専門科目が多く、それらの一部を1年次前期にまで前倒しせざるを得ない。看護の大学教育において教養教育の重要性が唱えられながらも、実際にはそれが十分に実現できず、このようなカリキュラムが必要になるところに、問題の一つがあるように思われる。

4-2-5 一般教養に関する教育の授業科目の履修状況

(1) 平成12年度

授業科目区分名	最小値 (人)	平均値 (人)	最大値 (人)
医学科 旧カリキュラム			
人文	0	4	8
自然	96	96	96
外国語科目	0	50.6	96
保健体育実技	95	95	95
基礎教育科目	11	69.5	95
新カリキュラム			
総合人間学	23	72.3	95
基礎科学	95	95	95
語学	17	47	95
看護学科			
基礎科学	19	49.8	60
人間科学	10	48	65
語学	29	40.2	64

(2) 平成12年度

<1> 分母を履修登録した学生数とした場合>

授業科目区分名	最小値 (%)	平均値 (%)	最大値 (%)
医学科 旧カリキュラム			
人文	100	100	100
自然	100	100	100
外国語科目	82.0	93.1	100
保健体育実技	100	100	100
基礎教育科目	83.9	94.2	100
新カリキュラム			
総合人間学	74.4	94.7	100
基礎科学	76.8	96.1	100
語学	88.6	95.7	100
看護学科			
基礎科学	100	100	100
人間科学	60.0	98.4	100
語学	96.7	99.6	100

<2> 分母を成績判定を行った学生数とした場合>

授業科目区分名	最小値 (%)	平均値 (%)	最大値 (%)
医学科 旧カリキュラム			
人文	100	100	100
自然	100	100	100
外国語科目	82.0	93.1	100
保健体育実技	100	100	100
基礎教育科目	83.9	94.2	100
新カリキュラム			
総合人間学	74.4	94.7	100
基礎科学	76.8	96.1	100
語学	88.6	95.7	100
看護学科			
基礎科学	100	100	100
人間科学	60.0	98.4	100
語学	96.7	99.6	100

(3) 平成12年度

平均値 (単位)	最大値 (単位)
医学科 72.4	医学科 79
看護学科 30.8	看護学科 35
大学全体 57.3	

4-3-2 一般教養に関する教育の授業科目における履修登録者数の上限設定

人数区分	授業科目区分名	授業科目名
1. 20名以下		
2. 21名以上 ~50名以下		
3. 51名以上 ~100名以下		
4. 100名超		

4-3-3 一般教養に関する教育の授業科目におけるシラバスの実施状況

(1)

・「2」を選択した場合

	授業科目区分名

・「3」を選択した場合

	学部名
	授業科目区分名

・「4」を選択した場合、以下の欄に具体的に記述してください。

(2)

1, 2, 3, 5

・「7」を選択した場合、以下の欄に具体的に記述してください。

(3)

2

(4)

1

・「4」を選択した場合、以下の欄に具体的に記述してください。